
イストワール

m e y u u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イストワール

【Nコード】
N3443I

【作者名】
meyuu

【あらすじ】
突然の両親の死。
高校を中退し、ホストへなった優羽。
そこで出会った先輩ハル。
運命の女性との出会い。
優羽の数年間の物語。

〜優羽〜先輩の風邪〜

「ハルさん、昨日はありがとうございました」

控え室にいた優羽は入ってきたハルに昨日のお礼を言った。

金はいつもハル持ちだった。

一度、キャバクラにハルと行った時に優羽が会計をしようとしたら、先輩に恥かかせんのかとこっぴどく怒られた事があった。それ以降優羽はハルと一緒に時は金の事はハルに任せていた。

「昨日？ああ。また行こうな」と言うハル。なんだか元気がない様子だった。

いつもは、どうだったか細かく聞いてくるハル、そしてダメだしをする。それがなかったので優羽は不思議に思った。

コンコン。ガチャ。

ポイが入ってきた。

「ハルさんご指名です。お願いします。」

「ああ、分かった」とハルが答え、一度鏡で身なりを整えてから控え室を出ていった。

ブーブー。ブーブー。

携帯のバイブが鳴った。

優羽は自分の胸ポケットから携帯を取り出し確認した。メールが一件入っていた。

メールを開くと希美からだった。この前、希美とわかる時に自分の名刺を渡していたのだ。

名刺には仕事用の携帯アドレスと番号が書かれている。

優羽は嬉しくなり、急いでメールを開いた。

内容は土曜日楽しみにしているとの簡単な内容だった。

希美も自分のように土曜日の事を楽しみにしていたのかと思うと、嬉しさでいっぱいになり、自然に笑みがこぼれた。

優羽も楽しみにしている事と早く会いたいとゆう事を返信した。ケ
ーキの絵文字も付けた。

土曜日はどこに行こうか？

どんな服装で行こうか？食べ物は何が好きなのか？

どんな話をしようか？ 希美の

声。 希美の笑顔。 希

美の唇。

いろんな事を考え、わくわくしながら妄想を膨ら
ませていた。

コンコン。ガチャリ。

「優羽さん、ハルさんがお呼びです。2番テーブルです」
とボーイが言った。

「ハルさんが？…分かりました。今行きます。」ハルは20分前に
指名が入り接客しているはずだが…。

優羽は控え室を後にし、急いでハルのいる2番テーブルへと急いだ。

ハルは二人の客の相手をしていた。

「失礼いたします。」と言い、ハルの方を見る優羽。

「この人が優羽くん？」と一人の女性がハルに聞いた。

「はい、そうです。俺の専属後輩です。後半のお時間かわいがってやって頂けますか？」とハルが客に言った。

「うん…、ハルの頼みだし、しょうがないっかあ。ねえ」ともう一人の女性と目を会わせる女性。

もう一人の女性は優羽の事を上から下までじっくりと見た後に言った。

「そうね、私はこの子でもオツケイよ」

優羽は何を言ってるのか良く分からなかった。もう一度ハルの方を見た。

「俺のかわいい後輩です。よろしくお願いします。」と言い、席から離れた。優羽の横を通りながら、「ちよつと頼む」と小声で言い去っていった。

優羽は良く分からなかったが、ハルの言う事に従った。

「はじめまして。優羽です。ハルさんの代わりよろしくお願いします。」

「お願いね、こっち座って」と言い席を空ける女性達。

「はい、失礼します」と言い、優羽は女性達の間座った。

優羽は二人の事は名前が知らないが見覚えがあった。よく二人で来店し、ハルを指名していた。二人とも25、6歳ぐらいに見える。

「ねえ、ハルの後輩なんだねえ！専属って？」と女性が聞いた。

「はい、俺の先輩はたくさんいますが、ハルさんは俺の教育係で、俺もハルさんの身の回りの事任されてるんです。」
と優羽が答えた。

「ふ、そんなんだあ。ハルってどんな先輩なの？」と女性が質問する。

「優しくて、かつこいいです。」わがままだとゆう事は言わなかった優羽。

「やっぱり！ハル優しいよねえ！超かつこいいし！」と女性はテンションが高くなった。

「ハルは彼女いるのかなあ？」ともう一人の女性が優羽に聞いた。

「いえ、ハルさんは仕事一筋ですよ。」と彼女が居るのか居ないのかは良く分からなかったが適当に答えた。

「そうかあ！良かったあ！ねえ」と女性達は盛り上がっていた。

「ハルさんの事好きなんです」と二人に問いかける優羽。

「もう大好き！あんなかつこいい人いないよねえ」

「うんうん！声もかつこ良すぎ！」

「優しいし！」

「うん！背も高くてスタイルもいいよね！」

「後さあ、ハルって手が綺麗じゃない？」

「あ、それ私も思った！」

優羽は二人の女性の真ん中にいたので、交互に顔を動かしながら話

を聞いていた。

「ハルってどんな子がタイプなの〜？」と優羽に質問する女性。

「年下が好きって聞いてます」と答える優羽。

自分が教えてもらったように、きっとハルもこの人達に自分の年は二人よりも年上とゆう事になっていると思っただけ、優羽はそう答えた。でも本当はハルは年上が好きっばい。

「やった！ハルは26歳だから、私達ハルより年下だね〜！」と二人で喜ぶ。

やっぱり。優羽の読みは当たっていた。

ハルは今23歳。この二人の女性の前では、26歳とゆう事にしてあるようだ。

結局、ハルの質問攻めとどれだけハルの事が好きかの競い合いで、後半の30分は終わった。

「はあ…」と優羽はため息をついた。

優羽は控え室に戻っていた。

さっきの二人の弾丸トークにどっと疲れてしまっていた。しかも、ハルの客だし、ハルについての質問だったので、変な事を言わないように全神経を集中し、言葉を選びながら接客した。

名前すら聞けなかった。

ハルは接客中に席を空ける事は今までになかった。先程、控え室でしゃべった時も元気がなかったハル。

優羽は心配になった。

それから、その日はハルの姿を見る事はなかった。

仕事が終わりに、帰りにボーイにハルの事を聞いた。

「今日はもう上がるから、何かあったら優羽さんに言ってくれって言ってましたよ。ん〜少し顔色も良くなかった気がします。」とボーイが答えた。

「そうですね…ありがとうございます」と優羽が言った。

帰り道。ハルのマンションに寄った。ハルの住んでる所は店から車で10分程の高級マンションの最上階だった。

ピンポン。

チャイムを押す。

反応はない。

優羽は鍵を取り出し開けた。

優羽はハルの身の回りの事をしている為、ハルのマンションの鍵はいつも持ち歩いていた。

玄関に入ったが、電気は付いておらず真っ暗だった。でも、ハルの靴がある。

「ハルさん？」

呼んだが返事はない。

電気を付け、リビングへ行った。

スーツの上着がソファに引っかけてある。

そのソファにハルが横になっていた。

だが、何だか苦しそうだ。

優羽はハルの顔をのぞきこんだ。

ハルの顔は赤く、汗をかいている。とても苦しそう。顔を触ってみた。

とても熱い。熱があるようだ。

「ハルさん、どうしたんですか？大丈夫ですか？」ハルの体を揺すりながら優羽が聞いた。

「…ああ、優羽か…」

ハルが目を開けて、か細く答えた。

「具合悪いんですか？熱があるみたいですよ。」と心配しながら聞くゆう。

「…ああ、少しな。でも大した事ないから心配すんな」と微笑むハル。

優羽に心配かけたくないようだ。

「ハルさん、着替えてベットにいきましょう」

ゆっくりとハルを起こしながら優羽が言った。

「ああ…」かろつじて返事をしながら起きあがるハル。しゃべるのも辛いようだ。

優羽はハルを寝室まで連れて行き、服を着替えさせ、ベットに横にさせた。

隣の部屋へ行き、棚から風邪薬を探した。キッチンへ行き、冷蔵庫から水のペットボトルを取り出し、ハルの所へ戻ると、薬をハルに

飲ませた。それから、バスルームへ行きタオルを持ってきた。キッチンに行き、お水を溜める入れ物を探した。食器棚にボールがあった。

ボールに水を溜め氷を入れ、タオルと一緒にハルの所へ持って行き、タオルを水に浸し、きつく絞ってハルのおでこに乗せた。

優羽はいざとゆう時、以外とテキパキ行動する。

そんな優羽の事を良く知るハルは、優羽の事をとても信頼していた。信頼しているからこそ、優羽に合い鍵を渡していた。まあ、鍵を貰ってから優羽は綺麗に掃除しとけとこき使われるぐらいだったが。。。

優羽はリビングへ戻り、少したったらハルの様子を見に行こうと思いついてソファに座り一息ついた。

ブーブー。ブーブー。

どこからか携帯が鳴る音がしている。

探していると、どうやらハルのスーツに携帯が入ってるようだ。スーツから携帯を取り出す優羽。

「百合」と表示されている。

優羽は知っている名前だったので少しびっくりした。出ようかどうしようか迷った。

でも、大事な用事なのに電話に出なければ、後でハルにぶつとばされると思った優羽は電話に出た。

「もしもし」

「ハル様。百合でございます。今日も来ていただくお約束でしたのに……やはり、優羽も知っている人だ。昨日あった百合とゆう女性だった。」

「すみません．．ハルさん今具合が悪くて寝てるんです。代わりに取りました。」と優羽が言った。

「…あなたは？」と百合が聞いた。

「優羽です。」

「ハル様の後輩の優羽様ですね。昨日来ていただいた」

「はい」と優羽が答えた。

「ハル様、具合が悪いのですか？」と心配そうに聞く百合。

「はい、風邪みたいです。だから、たぶん連絡できなかったんだと思います。」と優羽が答えた。

「そうでしたか。分かりました。それでは。」と百合は言い電話を切った。

この事はハルが目覚めた時に言おうと思った。

なんだか急に睡魔が襲ってきた。時計を見ると、深夜2時を回った所だった。

優羽は少し眠ろうと、ソファーに横になった。

そして、眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3443i/>

イストワール

2011年1月9日02時14分発行